

平成27年2月3日(火)

【鉄矢会長】 よろしいですか。次第にのっとして、事業実施報告、次第の2番に入ります。では、事務局から、お願いします。

【中村学芸員】 先ほど見ていただいた所蔵作品展「中村研一 入門と応用」が資料1の開催した展覧会・ワークショップ等の展覧会の欄にあります。今回の展示はⅠ期とⅡ期、前期後期で展示替えを一部行いまして開催いたしました。

関連事業のほうから少しお話をさせていただきたいんですが、皆様に何度もお話をしたリピーター特典の「また来てね！カード」を作成しまして、しおり型のものを今回は開催中に配布いたしました。1つ、封筒をお渡ししていますが、こちらの中に入っているのが、「また来てね！カード」を持ってきた方用の特典グッズのカレンダーと、缶バッジ、8種類の柄があるんですが、それから選べるような形でプレゼントを皆さんに差し上げております。リピーターカードをお持ちになった方が何人いるかというのは、まだ展示が2月8日までなのでわからないのですが、結構何人かの方は持ってきてくれていて、最初、こちらとしてはカレンダーのほうが人気かなと思ったら、意外と缶バッジを選ばれる方が多かったです。おもしろい傾向があるなと思って見ておりました。

こういう特典があるというのはすごくお客様も喜ばれていたんで、今回は同じ展示の期間内ということでしたけれども、また何か、何回か来た人にはプレゼントとか、そういったような形で発展してやっていけたらいいなというふうに思いました。また展覧会終了後に、どれぐらいの効果があつたかというのを数字で見たいなと思います。

続きまして、今、写真に出ているのが今回の展示の中で行いました「おはなしのへや」という展示です。今回、1日目は、11月29日に開催したんですけども、いつも「おはなしのへや」に来ているこの近隣の子供たちの子供会があつたということで、いつもより人が来なかったというような会でしたが、実際に通りすがりの方で、お子様連れで、お父さんお母さんは展示を見たいけれども子供は展示を見たくないという方のご利用があつたりしたので、その日に開催していてよかったです。2回目の1月7日の水曜日に開催したのがこの写真の様子でして、この日はすごく多くの方が来ていて、子供も大人も含めて39名が来ていました。お正月ということもありましたし、平日だったので、皆さん結構、

足を運びやすかったのかなと思います。お正月だったので、福笑いなどをして遊んでいました。

あと、続きましてギャラリートークも開催しまして、こちらはちょっと、参加者は少なかったんですけども、あわせて3名という形で開催いたしました。

次の2ページ目に入らせていただきます。今回、「入門と応用」の展示の前に、小特集1という形で、「洋画家の食卓」というタイトルで、中村研一の食にまつわる作品だったりエッセーを紹介する展示を行いました。それに関連してワークショップを開催して、チラシを皆様にも配付しましたが、中村研一のレシピを実際に再現して食べようというような内容の企画でして、現代アーティストのEAT&ART TAROさんという方がいらっしゃいまして、その方が昭和の料理本とかのレシピを再現するレトロクッキングというプロジェクトをやっている方なので、ぜひ中村研一のものもやってもらえませんかというような形でお願いしたところ、結構、中村研一の料理への思いだったりとか、そういう考え方に共感していただいて、今回、こういったイベントを開催する運びとなりました。

これはイベントの写真なんですけれども、中村研一がフランスにいたころ、1920年代のフランスでどういう文化があったかというのをまず紹介していただいて、ちょうどこのスライドのところは中村研一がよく行っていたカフェのポスターなんですけれども、そういうのも調べてこういうふうなスライドで紹介してもらいました。そういったフランスで中村研一はいろいろ料理とかを学んできたんだと思うんですけども、今回つくった料理は、スープをつくってもらったんですが、先ほど追加資料でお渡しした研一のレシピが書いたものがあるんですけども、そちらに献立が下のほうに書いてあって、一番最初に皆さんに振る舞うものの中にスープがあると思うんですが、それをつくって振る舞うというものでした。つくっている様子が動画でありますので、少しだけ見ていただきます。スープ・アラ・ジャニエールというものをつくったんです。バターが卵ほどの大きさという、すごい量を使いました。

【鉄矢会長】 これはほんとうにこういうものがあるの。それとも、彼の創作料理なんですか。

【中村学芸員】 それが、元ネタがありまして、『マリーおばさんのフランスの家庭料理』という本を研一は愛読書にしていたらしく、中を見ていたら、ちょうど似たような野菜スープがあったみたいです。卵ほどの大きさのバターを入れていて、オリーブとかも入っているんです。

【鉄矢会長】 最後にバターを入れるんじゃないんだ。

【中村学芸員】 あ、最後に入れます。

【鉄矢会長】 また入れるんですか。

【中村学芸員】 野菜を先にバターでいためて。

【薩摩学芸顧問】 かたい野菜をいためるためにバターを入れて。こっちのレシピには書いてないんで、いためると。

【中村学芸員】 そうなんです。レシピを細かく書いていないので、TAROさんが少しアレンジして、やりやすいようにやっているみたいです。この間のワークショップのときにはあえて牛乳を入れないでバターだけにしたんですけれども、それでもすごく味がしっかりしていたので、こんな感じで作ってもらったものをみんなで食べて。TAROさんは調理師の資格を持っていらっしゃる方で、すごく料理も詳しいんですけれども、研一のフランス料理は本格的なものらしいです。ちゃんと学んであるというか、ちゃんとしているなというふうにおっしゃっていました。あと、メニューの最後に「カフェ」と書いてあると思うんですけれども、メニューの最初と最後だけをやるといような感じで、最後、研一のコーヒーの入れ方をまねをして入れました。一回コーヒーを入れて沸騰させるんです。黒い汁をつくって、それをこして、また豆を入れたフィルターにまたこすという二度入れるような形で入れてみたんですけれども、すごく濃くなるかと思ったら、意外とあっさりして飲みやすいコーヒーができたので、ぜひ皆様もやってみていただければいいかなと思います。

アンケート結果を皆様にお渡ししたように、やっぱり食というのは結構興味がある方が多いんだなというのがすごくわかりました。食を通して中村研一の人間性だったりとか、どういう人なのかとすごく興味を持ってくれた人も多くて、今までここの美術館は敷居が高くて入れなかったけれども、今日はすごく、中村研一に親しみが持てましたみたいなことをおっしゃる方がいたので、新しい一面を皆さんに知っていただけて、美術館もすごく身近なものに感じてもらえたのかなと思っております。食シリーズはほんとうにまだまだいろいろできそうなことがあるので、今後もレシピのほうをまとめていったりとかしていけたらなと思っております。(スライドの写真)これは中学生がつくってくれたワークショップ掲示板です。

続きまして、開催しました教育普及事業についても続けてご紹介させていただきます。鑑賞教育を今年度は所蔵作品展で4回行いました。前原小と一小と三小と本町小で行いま

した。本町小の12月9日に行った鑑賞教室の前に、先生のほうから事前授業をしてほしいということで、5日の金曜日に事前授業を行いまして、これは事前授業をやっている様子です。事前に中村研一の作品をカードにして、ちょっと簡単なゲームをやったんですけども、チームごとに好きな作品を選んでもらいまして、3つのルールでヒントをつくっていくというのをやって、音にまつわるヒント、形にまつわるヒント、色にまつわるヒントというものでヒントを出して、ほかのチームに作品を当ててもらおうような授業をやりました。

これが実際に鑑賞教室をやっているところです。私が作品を指すときに「手の平で指してください」と言ったら子供がまねをして手の平で指している写真です。

続きまして、今年度は市内の中学校の職場体験が3校ありました。最初に第二中、緑中、南中と、学年もクラスもそれぞればらばらだったんですけども、二中3名、緑中5名、南中5名の生徒が来てくれました。写真はちょうど監視業務を体験してもらっているときにお客さんに質問をされている様子なんですけれども、こういったことですか、あとは、作品調査のまねごととといいますか、やっていただいたりとか、あとはここに今、ホワイトボードに貼っているんですけども、今回は課題ということで、うちの美術館がバス停から駅から、アクセスが悪いとか、看板が少ないし、よく迷いやすいというお客さんの意見があるんですけども、そういった問題に対して何か対応策を考えてくれというような課題を出して、みんなで美術館から駅まで歩いて、どこに看板があるとか、どこにマップがあるというのを確認して歩いて回って、こういうふうに、ここに看板があるけど低いよねとか、ちっちゃいし目立たないよねと言いながら見て回って、みんなに対応策を考えてもらいました。こういうふうに、例えばプレートを設置するという案にしても、うちの美術館の雰囲気合うように木のプレートにするとか、そういうふうに個人個人が一生懸命考えてくれまして、結構おもしろいアイデアだったりとか、今すぐ実現できそうなアイデアもたくさん出たので、ぜひ少しずつでも参考にして実行していきたいなと思いました。職場体験に関しては以上です。

あと、最後に④のところになりますが、東京都図画工作研究会の北多摩大会というものが12月12日にありまして、研究授業に以前協力したということと、簡単に多摩地区の美術館のパネルを展示しないかと言われて、パネルをつくって展示をしました。府中市美と吉祥寺と三鷹市美術ギャラリーの4つでパネルをつくって映像を流すという形で参加させていただきました。あと、こういうふうに研究授業のところにも載っていたりというこ

とで、はげの森美術館というのを知っていただくいい機会になったのかなと思います。実際その後に、東村山の図工科の先生たちが研修に来たりしていますので、お互い連携するというのがうまくいくきっかけになればいいなと思いました。

開催した展覧会・ワークショップ等に関しては以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。何かこの件につきまして、質問やコメント等ありましたらお願いします。

【村澤委員】 私も、これは2回行きましたね。前半と後半とで、カレンダーをゲットしたんですけども、カレンダーは初めてつくったんでしょうか。何かこう、すごく立派なカレンダーで。

【中村学芸員】 初めてです。

【村澤委員】 いいなと思いました。

【荒木学芸員】 これも、学芸大学のデザイン研究室にデザインしていただいて。印刷会社にパッケージというか、カレンダーパッケージみたいなセット、形がもう完全に決まっていて、こちらの変更できるところが少ない、絵柄のところだけという、規格がかっちり決まっているかわりに安いプラン等をうまく使って、価格を抑え目につくってくれました。

【村澤委員】 1つつくるのに結構コストがかかっているんじゃないかなと。

何か、ただでいただいているのかなと。

【中村学芸員】 でも、バッジのほうがなぜか人気なんです。結構出ているので、意外と。

【鉄矢会長】 昔とちょっと違うみたいですよ。手帳も、昔はもらう手帳を使っていた人がいるけど、今はもらう手帳を使う人はいないとか、カレンダーも、もらうカレンダーはだんだん使わなくなっているって。

ほかにありませんか。

【平岡委員（館長）】 すみません、さっきのTAROさんのワークショップは取材が入ったのではないですか。

【中村学芸員】 そうです。お伝えし忘れたんですけども、ちょうど当日にジェイコム取材が入りまして、最初から最後まで撮っていただいて、2月5日の11時からと8時から、1分半ぐらいなんですけれども、放送してくれるそうなので。

【平岡委員（館長）】 地域ネタの番組で紹介をしてくれるという。

【中村学芸員】 「いまだこ！？イレブン」という番組なんですけど、YouTubeでも見れますので。

【鉄矢会長】 ほかにございますか。

では、私です。鑑賞教室で事前の授業をやったのは、やっぱりその後の普通の鑑賞教室は随分違いますか。

【中村学芸員】 はい。カードを持って行って見せたので、大きさが、こんなに大きいんだというのを驚いたりとか、あとはこんな色だったんだという、色がまず全然違うというのにすごく驚いていましたし、あとは、やっぱり実際に見たときの感動は大きかったみたいで、あのとき見た絵がこれなんだというのは、反応で、わかったので、やっぱり事前にやると見方が少し変わるんだなというのは感じました。

【鉄矢会長】 それで、今後、学芸員の負担がただ増えてしまうだけなので、でも、事前はやったほうがいいけれども負担が増えるのを避けるとすると、学校の先生に上手に事前の授業ができるパッケージをちょっと渡すとかができれば、そのときに簡単に、こういうことをやっておいてほしいですというのを渡しておく、図工の先生たちがやってくれるんじゃないかなと思ったんですが。

【中村学芸員】 そうですね。確かに、今回使ったアートカードみたいなものを事前につくっておくだけでも、やっぱり先生たちも事前に授業がやりやすいと思うんです。こういう作品があるんだよとか、こういうものがいっぱいあるところに行くんだよという話がしやすいと思うので、そういうものはぜひ、先生たちと話し合った上で、何か教材だったりパッケージングされたものをつくっていただけるといいなと。

【鉄矢会長】 何か負担のない中で。負担を減らしながら効果のあるようにするための何か方策等につながるといういいなと思った次第です。

では、次の、平成27年度事業についてでよろしいでしょうか。これは、今後の開催予定ということでもいいんですか。

【荒木学芸員】 現在の展示が終わってから、年度を超えて春までの予定です。まず展覧会が、企画展「生誕120年 河野通勢と中村研一」展、こちらが3月24日から5月24日までです。

以前にお話ししましたとおり、中村研一と同じく小金井市に住んでいた河野通勢、しかも、同い年で、二人とも今年が生誕120年ということで、もともと以前から河野通勢を紹介したいということもあり、これはいい機会だということでこの二人展を企画しました。

お手元にプレスリリースをお配りしております。チラシ、ポスターの進行がおくれていますのででき上がっていませんが、でき上がりましたらまた市内あるいは各地の美術館等に配布いたします。

関連企画として、講演会、ワークショップ、それからギャラリートークを予定しております。講演会のほうは、山村副会長にお願いいたします。

【鉄矢会長】 これはどこでやるの、講演会は。

【荒木学芸員】 この部屋でやります。この部屋をつくる時に、もともとイスをぎっしり入れて50ぐらいまで入れられるスペースをとということで……。

【鉄矢会長】 要事前申し込みで、定員は50？ まだそこまでは決めていない？

【平岡委員（館長）】 一応、40と書いてある。

【荒木学芸員】 理論上50入れられるんですけども、実際かなりぎちぎちになるので、あとは作家関係者がいらっしゃることも考えて40にしています。

ワークショップのほうも、まだタイトルが決まっていらないんですが、内容は大体考えていて、またちょっと以前から間があきましたけれども、絵画のワークショップ、絵を描くワークショップを用意ということで、絵の具とかクレヨンなどだけではなくて、今までやってきたコラージュ、貼るといふものも含めていろいろな技法を大人も子供も体験してみませんかというような内容にしようと考えているところです。こちらが5月までの展覧会の予定です。

ちょっと間を1つ飛ばしますけれども、4ページ目に「河野通勢と中村研一」展の期間中に行う「おはなしのへや」の予定が決まっております。先ほどの報告でもあったように、平日に開催したときと土曜に開催した場合には、参加者数とかあるいは参加者のお子さんの年齢層が変わっていくというので、今後はそれをちょっと反映させたプログラム設定をしていくのがいいのではないかということ、話し合っ、1回目と2回目では内容というより対象を変えた「おはなしのへや」を実施してみようと計画しています。

【中村学芸員】 そうしましたら、間の教育普及事業で、「ビーズ刺繍でつくる！キラキラワッペン ワークショップ」というものがあるんですが、こういったチラシをお送りしていると思うんですけども、今回のワークショップはこの多目的室ではなくて、2階のラウンジで行う予定です。

なぜかといいますと、2階のラウンジはもともと富子さんの生活空間だったわけですが、富子さんは手芸というか、編み物だったり、レース編みとか、そういったものをよくやら

れていたということで、今回、手芸のワークショップということなので、画家の奥様が暮らしていた空間で、みんなでちくちく作ることで、雰囲気も何というか、ゴージャスというか、優雅な空間ですので、ちょっとそこを利用して、このよさを生かしたようなワークショップができないかということで、ビーズ刺繍のワークショップを企画しました。

山本彌さんという方なんですけれども、アクセサリなどをつくっている作家の方で、多摩美を出てそういったアクセサリをつくられている活動をしておりまして、今、プラスチック板、プラ板とかのアクセサリがすごくはやっているそうなんですけれども、そういった本も出していて、簡単につくれるようなアクセサリのワークショップをもともとやっていた方なので、今回お願いをして、ワークショップを、それが2月21日土曜日の午前中となっております。

【鉄矢会長】 はい、ありがとうございます。この件に関して質問等ありましたらお願いいたします。

【村澤委員】 山村先生のお話が1時間半ということで、何か、プロ向けというか、専門家向けになるのでしょうか。

【山村委員】 いや、今、頭を痛めているんですけれども。(笑) 引き受けたのはいいんですけども、これが接点がないんです。研一は小金井に45年だから、戦争中、戦後すぐだったのかな。それで、通勢は50年に死んでいるので5年ぐらいしかなくて、それ以外に何か接点はないのかと今、探しているの。何かあったら教えてください。

【荒木学芸員】 1920年代に、同じ画廊で個展をやっているんです。

【山村委員】 流逸荘だよ。そこに関係があるのかね。神田の流逸荘というギャラリーで、研一にとってもそれが初めての個展だし、まあ、そんなことで。

【鉄矢会長】 でも、タイトルは「武蔵野の美術家たち」ですから、別に2人だけじゃなくていいですよ。

【山村委員】 そう思ってつけたんですけど、何か、よく考えると2人がね、何も接点がないんじゃないかなと思っただけ。

【村澤委員】 1時間半って、結構長い。大学の授業並みで。

【山村委員】 いえいえ、一般の人にわかりやすいようにと考えていますので。

【村澤委員】 そうですか。スライドとかも使われるんですか。

【山村委員】 もちろん。それがないと、話すにはとてもじゃないけど。

【鉄矢会長】 では、よろしければ次の平成27年度の予算について。資料番号はない

ですね。

【吉川係長】 すみません、資料番号がついていなくて、平成27年度予算内示状況という横長の資料でございます。恐縮ですが、今、内示の状態ですので、後ほど資料を回収させていただきますので、よろしく願いいたします。今、ここに書いてあるとおりの内示が出ている状況です。

特徴を説明させていただきますと、運営に要する経費のところですが、数字を見ていただくと、要求額より予算案のほうが高くなっておりますが、これは非常勤職員の交通費の算定が違っていたようで、正しい算定になったのがこの予算案のほうです。必要経費が上乘せされたということで、案のほうが少し多くなっております。

特徴ですが、美術館オリジナルグッズ制作委託料というものを、新規に要求いたしました。これは、夏の猪熊弦一郎展のときの布製品のグッズの売上が大変よくて、仕入れたらすぐ売れてしまったという現象がございまして、はけの森美術館では、布の製品のグッズというものが1個もなくて、今回、共同展をやったことによって、布のグッズのニーズがあって、仕入れた分、きちんと費用が回収ができるというデータが数字として出ましたので、そういうデータを元に要求したところ、多分、つくでしょうという形の内示が出ました。手拭いハンカチと、あとは附箋を新たにグッズとして制作しようという予定でおります。

これも実績データの数字がなければ、いくら売れますとか、ニーズがありますと言っても、認めてもらうには、なかなか難しいところがございますので、共同巡回展の一つの成果としては、大変いいデータが取れたと思っております。

次は、はけの森美術館の維持管理に要する経費ですが、こここのところ、職員がいる下の事務室のエアコンが、冬になると雪が降ってくるという状況にあり、いつ壊れてもおかしくない状況がございましたので、エアコンの交換。あと、エレベーターも、かなり年数がたっておりますので、部品の交換、修繕。あと、高圧受電設備、高圧開閉器という、電気関係の機器の修繕を行う予定です。

3点目ですが、はけの森美術館事業に要する経費ということで、平成25年、26年度と続けました共同巡回展の駅貼り広告というものは、助成金が出るということで予算化されていたんですけども、今回、共同巡回展以外で初めて要求していますが、やはり共同巡回展の広報効果があったということで、かなりその辺は認められているような内示の状況です。

ただし、このところ毎年要求している額縁の作製費とか、この間いただいた、前回運協でも話題になっておりました寄附された油彩の作品の修復費というものは、難しい状況になっております。

課題なのですが、今回の予算要求の中で、25年、26年と、一般財団法人地域創造の助成金をいただいたことで、かなり大きな企画展を2年続けてやっていたんですが、来年度、平成27年度はそれがないということで、企画展関連の予算の獲得が本当に困難をきわめまして、はっきり言えば、企画展はやらないでいいじゃないかと。所蔵作品展だけでいいのではないかという話が出ておまして、はげの森美術館の中で、所蔵作品展も、もちろんなんですけれども、企画展もあわせて行うことが必要なのだと、その重要性を示す方策というのを考えていかなければいけないのではないかと感じました。

所蔵作品は沢山ありますので、財政状況が厳しくなってくると、所蔵作品をただ飾っていればいいという考え方がどうしても出てまいりまして、研一の作品を、さまざまな切り口で工夫して見せることも、この間の食のワークショップもそうですし、今回、次にやる手芸のワークショップもそうなんですけれども、絵画だけではなくて、さまざまな研一の生活の切り口の中から見せていくという部分も、当然やっているんですけれども、それだけではやはり限界がありますし、ここに来館してくれる方を増やすという方策としては、難しいのではないかと感じておまして、やはり所蔵作品展と同じように、企画展も重要であるということを、次回以降の運営協議会の中で、検討していただければと思っております。

下に、申請中の助成金の状況を記載しておりますけれども、今、これだけ申請しておまして、一つ内定が取れているものがあります。花王芸術・科学財団なんですけれども、初めて民間の財団から内定をいただきまして、あとは、まだ3月にならないとわかりませんので。そういう助成金が取れないと企画展ができないという話になってしまいますと、助成金というのは不確定なものですので、その辺のところを有識者の先生方のご意見を聞けたらよろしいかと思っております。

内示の状況は、そのようなところです。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

回収資料ですけれども、今お話があったように、2つの展覧会を行うことの重要性というのを運営協議会のほうで協議してほしいという話がありましたので、この点について、もしご意見がございましたら、今、または今後メールでというのだと思うんですけれども、

とりあえず今ごございますか。

【山村委員】 企画展は美術館にとって命というか、血液みたいなものなので、それが流れていないと、職員の意気とか士気にもかかわるし、美術館自体、生き物ですからね。息をして、呼吸して、食べて、そういう意味で展覧会を定期的を開催して、それをまた周知して、市民の皆さんに知っていただいて、美術館で今こういうことをやっているんだとか、今、こういう絵がかけてあるんだとか、今度、行ってみようかとかというふうに思ってもらうのは、本当に必要不可欠だと思います。もちろん常設も重要なんですけども、常設が普段のご飯だとしたら、企画展はおかずみたいなもので、やっぱり年間を通して、ご飯とおかずの組み合わせがちゃんとしていないと、やっぱり食べに行こうというか、行ってみいたいという気持ちが、なかなか起こりにくいんじゃないか。

また、中村研一さんに、去年、持ってもらうきっかけというのは、今回の河野先生もそうですけども、展覧会があつて、行ったら中村研一の絵が見れてすごくよかったとか、何か違うイベントで行って、常設に行ってみたら、すごい絵に感動したとか、いろいろなきっかけがあるので、そういう多様性というか、本当にいろいろなきっかけで美術館に来てもらって、絵に親しんで、さらにそれがほかのところで、その人の人生とか、子供だと情操教育だとかに回っていくというものなので、ただ常設だけやればいいというのは言語道断というか、美術館そのものの存在意義にかかわってくるので、財政状況が厳しいのはよくわかるんですけども、厳しいなりに、せめて展覧会、企画展が年に2回だけでも、普通だったらもっと、5回ぐらい開催したいところなんだけれども、せめて2回だけでもやらせてほしいと。それが絶対不可欠ですよというふうに委員としては思います。

【村澤委員】 市民の立場からも、何かきっかけがあると。やはり近くにあると、なかなか足が向かないものなので、変わった企画があると、行ってみようなど。久しぶりに行ってみようかなという気にはなります。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。

私も、呼吸をしているようなものだと思って、新しい空気を入れないと、何も新陳代謝が起こらないと思っているので、これは美術館の使命の一つだと思っています。市民に対しても、対比して見せるとか、関連させて見せるとかということで、中村研一をわかてもらおうということがすごく重要なんだと。中村研一を所蔵しているところがあるからというので、やはり地域愛につながっていたりしているのと、地域文化に対して語れる子供たちが増えたり、語れる大人が増えるということは、すごく重要だと思っていますので、小

さくてもいいです。企画展をやっというものがあれば、学芸員のほうも、助成金を取ってもっと膨らませたいという意識も出ると思うんですね。そういうところのためにも、持つべきであると。委員の立場から鉄矢でした。

またほかにおもしろい、これ、詰めておくと、いいアイデアだよなんていうものがありましたら、ぜひ美術館のほうにメールか何かでネタとしてお送りいただけるとありがたいと思います。

5番目、「平成26年度運営協議会、総括等について」、年度の最後に皆様から。では、最後に締めるほどの実力がないので、私から言っちゃっていいですか。26年度運営で、中村研一の美術館の中で、中村研一としても、入門と応用、こういう企画が生まれたり、それから、小さな美術館である特徴だったり、今回の立体のものも入れて共同したりというふうに、たくさんの興味深いものが動いていて、学芸員の方とも、図工の展覧会でお会いしたり、活躍というか、活動がすごく上手にできているんだろうと思っています。

まだまだと思って、ストレスをかけるのも一つですし、ただ、持続可能なものを上手にやっていくということのコントロールをどういうふうにするかというのが、これから難しいんだろうと思います。私のほうは、そんなふうに、今年、26年度を見ております。

それから、26年度の3月までに、もう一個だけ助成金があるのが、私のほうで別の意味で狙っているのは、緑と水の森林基金、緑と水の森林ファンドというのがあるんですけども、これは緑地維持に関するワークショップみたいなものをやると、100万近くくれるので、上手に、小金井の森の管理の方々とワークショップをやって、市民と終わると、ここがきれいになっているみたいな、理解というような形でできたりするのではないかなんていうのは、すいません、押しつけ意見でございます。26年度はそんなふうに。

運営協議会のほうとしては、やはり相変わらず、皆さん、グツグツ思っているのは、やっぱりまだ非常勤の学芸員しかいないんだというのは相変わらず思っていて、これを何とか常勤化できないだろうかというのは、決して意見として消えたわけではないというのだけは、26年度の運営協議会の会長としてもお伝えしておきたいと思います。

以上です。皆さん、どうぞ。

【山村委員】 今、鉄矢委員長がおっしゃったとおり、やっぱり一番気になっているのは、学芸員の処遇というのか、勤務形態というのが、これもさっきの予算の話と同じように、難しいのは承知なのですが、やはり最低10年ぐらいのスパンで雇用を確保していた

だきたいなとずっと思っていてまして、10年あれば、その学芸員も、それなりの計画とか意識を持って、この美術館に貢献するためにこんな形でやりたいと。実際、またそれを振り返って、これだけのことができたというのを、毎年、繰り返していけると思うんですが、今は5年ということで聞いていますので、ちょっと短か過ぎて、やっぱりインセンティブとか、そういうのが働かないんじゃないかなと。そのわりには、すごくよくやってもらっていると思うんですけども、やっぱりそこはもう一度。難しいというのは館長さんのほうからも何度も聞いてはいるんですけども、何とかそれを、財政、それから、職員課のほうに伝えていただいて、それが今まで運営協議会、運営委員会、あるいは小金井美術館のもともとの計画の中にある、小さい美術館としての可能性とか、小金井らしさの情報発信とか、芸術文化の拠点としてって、これはみんな、拠点とか、発信とか、アイデンティティーとか、そういうのにかかわることは、やっぱり人間が担うことなので、それは、やっぱりその部分が一番基盤になると思っています。

それと、所蔵品と、図書と、そういう蓄積ですね。それが、何度も同じようなことを毎回言っていますけれども、そこをぜひ、26年度も課題になってしまいましたけれども、繰り返して、委員としては言っておきたいなと思います。

以上です。

【村澤委員】 美術館の組織運営につきましては、ちょっと素人なので、詳しいことはわからないんですけども、実際の展覧会につきましては、充実した1年だったと思います。いろいろな面で工夫されて、先ほどの、2回来たらプレゼントとか、あるいは夏場でしたか、何か動くものを作って、あれも非常にすばらしい。たしか、3都市か何かの共同だったかと記憶しているんですけども、あれも非常にすばらしい展覧会だったと思います。引き続き、そういった工夫の見られる運営をしていただければと思います。

【平岡委員（館長）】 1年通した中では、企画展も含めて大きなものもできましたし、一定の成果は上がっているのではないかと。集客は、展覧会自体によるところもありましたけれども、かなり集客が見られたものもあったという部分では、成果があったと思っていますので、やはり今後は展覧会に対する、関連企画の内容とか理由づけとか、そういうような部分で、いろいろなバリエーションとかも含めて、今後いろいろな角度から考えていく形で、展開できればいいんじゃないかなとは思っております。以上です。

【鉄矢会長】 ありがとうございます。学芸顧問の薩摩先生。

【薩摩学芸顧問】 開館からずっとお付き合いさせていただいて、何とかかんとか、こ

ここまで来たのかなという気はします。やはり、こういうものは立ち上げるときの苦しさというものは、どうしてもあるわけで、ただ、活動していると、寄贈の作品が増えてきたり、だんだん、認知度が、小金井だけでなく、あるいはもっと広いところで認知度が出てくるんだなと思っていますので、やはり文化というのは、カルチャー、耕すことですから、苦しくてもやっぱり地道に続けていかなければならないんだろうなと考えています。

やはり最大の問題は学芸員の問題で、いろいろな考え方もあるんでしょうけれども、確かに、こういう小さな美術館ですので、仮に常勤の学芸員をポンと置いて、その人が30年、40年、ここの主になるというのがいいかどうかという問題もあると思ったんですね。

ただ、最近、大学その他でも、特任とか言って、特任教授とか、要するに10年とか、そういう雇用形態が日本の社会の中で出てきていますので、今、山村委員が言われましたように、10年1期ぐらいで考えていくのが1つの方法かなと思います。10年あれば、それなりに取り組む気にもなるし、その中で、自分にはね返ってくるものもあるし、それからまた、その間に次のことを探すこともできると思うので、例えば10年任期で、本人が希望するならば、場合によっては、一回、再任ぐらいの感じの雇用形態にもっていければ、何とかここはやっていけるのではないかなと思っています。これはもう常に、何らかの形で主張はしていきたいと考えています。そうは言っても、非常勤でありながら、よくこれだけやってくれているということで、学芸員には感謝というか、励ましの言葉を送りたいと思っています。以上です。

【鉄矢会長】 学芸員の荒木さんが年度で終わりになるんですね。もしありましたら、何かお話しいただければ。

【荒木学芸員】 入ったころには、5年勤め上げることができるとは思っていませんでした。それだけ、この5年間に、いろいろな条件が整ったということでもあります。美術館の仕事は、結構長いことやっていたけれども、学芸員という名前がつく仕事は、このはけの森がやっとならということでしたので、いろいろ知ってはいたけれども、実際には初めてやる仕事も多かったですし、その中で、さらに非常勤ということの制限というものも、いろいろ……これはもう以前からも感じていたんですけども、はけの森では実質、常勤相当の仕事を非常勤がやるという、また別のきつさというのもありました。その一方で、自分の企画した展覧会を何本かできたということは、自分にとっても財産になりますし、今後ステップアップできるかわからないんですけども、次につなげていく基礎づくりができた5年間だったかなと思います。

【薩摩学芸顧問】 いや、もう学芸員としての力は立派に持っていますので、多分、この5年間、つらかったこともあるかもしれないけれども、決して無駄ではなかったと思うし、つながっていきますよ。一足先にやめた神津さんが、いろいろなところでいい仕事をしていますので。本人も、やめてから、しみじみと、この小金井の5年間で、社会の仕組みを学ばせてもらいましたと言っていましたので、今、ホテルオークラあたりで、彼女は活躍していますので、それはステップに続くと思うし、ここに顔を出してください。古巣と縁を切らないほうが何かといいですよ。

【荒木学芸員】 やり残したなと思っていることもあるので、これはぜひ宿題として、中村さんや、その後の人にやっていただきたいんですけども、まず、中村研一は、経歴一つも、再構築しないと、わかっていないことが実は多い。わかっているようで、わかっていない作家だから、調べがいがあるということ。もう一つ、中村研一の美術館というか、作品があるからそう思われるんだけど、小金井市の美術館だから、ほかにも作家はいるよということ。最後に河野通勢を出す企画を、もうやめるギリギリにもかかわらず、担当したのは、そういう気持ちもありました。

【薩摩学芸顧問】 いや、一つの目標として、個人の単著じゃなくてもいいけれども、そろそろ1冊、中村研一のがっちりした本を、この美術館で出すぐらいのことを考えてもいいと思う。調査と原稿さえ整ってくれば、出版する方法はありますから。そろそろ、ここで一つ、そういう目標を定めてもいいと。

【鉄矢会長】 ほかに、よろしいですか。では、「その他」、意見交換等に入りますけれども、意見交換等を思いつく前に、次回運営委員会の日程等を。

【平岡委員（館長）】 一委員ですけれども、ご提案がありまして、前回で言いますと、第1回を大体5月にやっております。ちなみに、前回は5月のかなり終わりの時期にやっているんですが、今回は、次の展覧会の終了が5月24日の日曜日ですので、中旬ぐらいをめどに設定いただければと思います。

【鉄矢会長】 じゃ、5月12日の火曜日、18時30分から、美術館で。

その他、意見交換等ございますでしょうか。

なければ、平成26年度第4回小金井市立はげの森美術館運営協議会を締めさせていただきます。ありがとうございました。

— 了 —